



東郷平八郎

とうごう・へいはちろう——弘化4(1847)年～昭和19(1934)年。薩摩藩士、大日本帝国海軍軍人。明治36年(1903年)に連合艦隊司令長官となり、日露戦争では日本艦隊を指揮してロシア帝国のバルチック艦隊と戦い、日本を空前絶後の勝利に導く。最終階位は元帥海軍大将。(肖像画は国立国会図書館ホームページより転載)。

「父が海上自衛隊に進んだのは、自然な流れだったと思います。父は銀行員でしたが、父方の伯父は海軍(昭和十九年に戦死)、母方の叔父も海上自衛隊で潜水艦に乗っていました。自然と将来は銀行員か、自衛隊かという選択肢を考えるようになりました。しかし、さらに遡ると、祖父・実も、母方の祖父・正木生虎も海

軍。男子全員ではないですが、一世代に一人は、縁あって海軍や海上自衛隊にお世話になっています。そう考えると、やはり、東郷平八郎元帥の存在は我々子孫の進路に大きな影響を与えているのかもしれないですね。

稀に見る強運の男

母方の祖父にとって私は初孫で、特にかわいがられて育ちました。きつと、私に曾祖父・平八郎の存在を感じさせようとしたのでしょう。中学に上がる前の春休み、江田島の海上自衛隊幹部候補生学校(旧海軍兵学校)を経由して、

曾祖父の故郷である鹿児島へ連れて行ってくれたことがあります。曾祖父は幕末の弘化四(一八四七)年、薩摩藩の加治屋町に生まれました。この狭い町内から西郷隆盛や大久保利通、大山巖など、数々の維新の志士たちが誕生し、「ふるさと維新館」という博物館も建てられています。

当時薩摩藩では「郷中」という独自の武士道教育があり、「負けるな」「嘘をつくな」「弱い者いじめをするな」などの精神を徹底的に叩き込まれたといえます。これが曾祖父の人格のベースとなりました。十四歳の時に薩英戦争が勃発、薩摩藩に従軍し、当時の世界覇権国家イギリスの艦隊に果敢に挑みます。この時の敗戦から、薩摩では島国日本は海防に力を入れなければならぬという意識が強まり、後に「陸軍長州、海軍薩摩」と言われるようになったのでしよう。



曾祖父・東郷平八郎が目指したものが

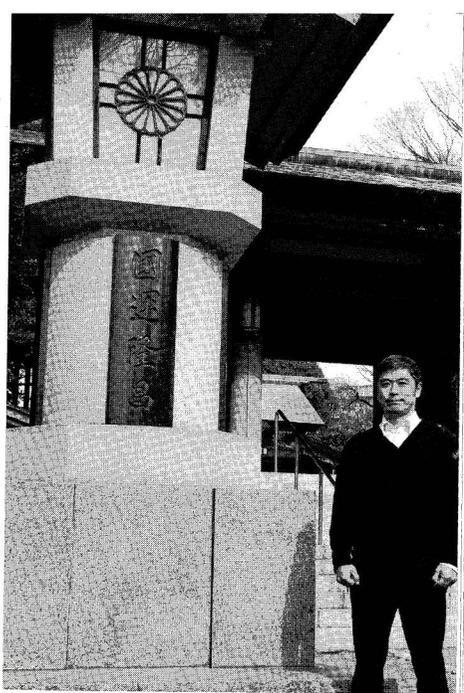
世界が最も尊敬する日本人といえば、東郷平八郎もその一人と言えるだろう。日露戦争の日本海海戦において、強国ロシアのバルチック艦隊を全滅させ、日本を、そして世界を植民地化から救った連合艦隊司令長官である。明治日本にあつて東郷平八郎が目指したものは何だったのだろうか。現在、海上自衛官として活躍する曾孫の宏重氏にお話しいただいた。

東郷平八郎元帥の曾孫に生まれて

日本海軍の指揮官として日清戦争及び日露戦争の勝利に大きく貢献、特に日露戦争の日本海海戦において圧倒的な戦力を誇るロシア艦隊を全滅させ、日本に歴史的勝利をもたらした人——東郷平八郎を語る上では、必ずこのように形容されます。

八郎という、日本の歴史に一つの足跡を残した人物だったことは幼少の頃から感じていました。というのも、東郷家では「東郷会」といって、年に一度親戚会を開催しています。もともとは、昭和九年五月三十日に亡くなった平八郎の命日の頃に集まって、皆でお墓参りをした後に親睦を深めていたのですが、せっかくの機会だから子孫にその存在を伝えていこうと、現在は東京・原宿の東郷記念館や東郷神社内等に集まり、

当番制のような形で平八郎について簡単な講話をする、という形で続けられています。最近では私も年齢を重ね、また海上自衛隊に籍を置いていることでもあって、東郷会をはじめ様々な場で曾祖父についてお話しする機会をいただいております。



ました。敬慕していた西郷と実兄の訃報に接し、「もし私が日本にいたら、西郷さんの下に馳せ参じていただろう」と言ったそうです。そして、絶対不利といわれていた日清、日露戦争を最前線で戦い抜き、命を落とさずに帰還、あの時代で八十七歳まで長生きしました。確かにそれほど強運の持ち主だったことが窺えます。

人生の逆境が後の活躍を支えた

実際に自分が自衛官として船に乗るようになって思ったのは、曾祖父の時代は、一体どんな船中生活を送っていたのだろうかということです。船の性能はいまと比べ物にならないでしょうし、スピードは遅いから一度海に出たら何か月

も陸に上がることはできません。当然、水や食料も制限されます。安全性も低く、揺れも激しい上、浅瀬がどこにあるなどという海の情報もない時代でしたから、まさに「板子一枚、下は地獄」。いまのようなスマートなエンジンではなく石炭のもうろうとした煙をずっと吸い続けた結果、曾祖父は肺カタルになり、明治二十年から二十三年にかけて療養の時期を過ごしています。

運がいいといわれてきた曾祖父の人生の逆境は、この三年間だったのではないかと思います。四十年代半ば、男の一番の働き盛りの頃です。七年も官費で留学し、恩返しするのはこれからという時、焦る気持ちもあったでしょう。また、医療技術も進んでいなかった当時は、病に倒れそのまま死に至るケースも多かったので不安に思う気持ちもあったと思います。しかしこの時、曾祖父は留学時代に勉強した国際法を再度独学で学び直すのです。この国際法の知識が、復帰後に迎えた日清戦争で

大いに役立ち、その勝運の流れはそのまま日露戦争のバルチック艦隊迎撃に繋がっていったといわれています。

そしてこの日露戦争の勝利は、当時ロシアの圧力に苦しんでいた諸国にも自国の勝利のように喜ばれ、曾祖父も英雄視されました。子供に「トロー」と命名したり、「トロー通り」と名づけた道も誕生、元国連事務総長のブトロス・ガリ氏などは、来日したら必ず東郷神社に参拝し、「アドミラル・トロー（東郷提督）」には子供の頃のすごく励まされた。心を解放された」と言っていたそうです。曾祖父にしてみれば、薩英戦争の敗戦から立ち上がり、幸運にも日本が欧米列強の植民地政策の波を食い止めることができた。その結果、アジア諸国の人たちに希望の光を与えられたとしたら、大変大きな喜びだったと思います。一方で、自分が英雄扱いされたことに対して違和感を抱いていたのではないかと私は感じています。

日露戦争後、曾祖父は江戸末期に横須賀に造船所をつくらった小栗上野介の遺族を訪ねています。小栗は明治政府に逆賊として処刑された

ましたが、「日本海海戦で完全な勝利を得ることができたのは、小栗上野介さんが横須賀造船所をつくっておいてくれたおかげです」と丁寧な謝辞を述べたそうです。自国にそういうインフラがあったからこそ、すぐに船を修理し、日本海海戦に臨めた。そのことに深く感謝していたのです。

東郷平八郎が買ったもの

先日、知人宅を伺った際、昭和二桁生まれというお母様にお会いしました。私が東郷平八郎の曾孫と知ると、小学校で習ったという「東郷さんの歌」を歌ってください、当時の国定教科書には必ず日露戦争時の曾祖父のエピソードが載っていたと、懐かしそうに話してくださいました。

軍人ということで、東郷平八郎が日本の歴史から削除されて約六十年。それでもなお覚えていてくださる方、あるいは若い方で

も高い関心を寄せてくださる方がたくさんいらっしゃいます。子孫というところで、初対面から打ち解けられるケースが多々あり、いつも曾祖父に感謝しています。

自身が海上自衛隊の自衛官、先祖が軍神と讃えられる東郷平八郎で、プレッシャーはないかと聞かれることがあります。むしろ私はそれを励みにしたいと思っ生きてきました。歴史に名を残した祖先を誇りに思いますし、それによって子孫の私に注目して下さることに感謝しています。ただ、それをステータスのような部分で比べてしまうと、自分で自分を苦しめてしまうのではないかと思います。

自分の器を高望みするのでもなく、「自分なんてこの程度だ」と限ることなく、コツコツといまできる努力を続けていく。曾祖父が療養中に国際法を学んだように、どんな境遇にあっても風向きが変わった時に力を発揮できるように、スタンバイしておくことが大切なのだと、曾祖父の生涯から思うのです。

私は、曾祖父が生涯を通して貫いたのは、結局は「負けるな」「嘘

をつくな」「弱い者いじめをするな」という郷中の教えだったのではないかと思います。

負けるなどは、人に負けないということではなく自分の弱さに負けないこと。陰日なたなく誠実に努力をし、いざという時に弱きを助け、傲慢な強者を挫くための実力を養う。その教えを体現したのが、ロシアを破り、アジアを勇気づけたバルチック艦隊迎撃だったといえるのかもしれない。

将たる者の五つの心得

曾祖父が残した言葉を探してみると、「皇国の興廃此の一戦にあり各員一層奮励努力せよ」など有名な言葉もあるものの、さすがに「沈黙の提督」と言われただけあって、それほど多くは残っていません。

しかし、もともと無口だったわけではないようです。先に紹介した留学の希望を申し出た際、後から大久保が「平八郎はおしゃべりだからダメだ」と人に語った話が耳に入り、以後沈黙に努めたと言われます。修養によって寡黙な人間になっていったのでしょう。晩年は、最後まで海軍内に大き

な影響を与え、その後敗戦によって海軍への評価が激変したことから、出処進退を含めて必ずしも評価をされない場合もあります。

しかし孫娘にあたる親戚の話では、家では孫にはとつても優しいお祖父さんだったといえます。また、自分のことは何でも自分でする人で、例えば靴下が綻んだら自分で繕っていたといえます。おそらくこれは船乗りの習性で、船の帆が破れたり、どこか壊れたらすべて自分で修繕しなければなりません。それが終生身について、周囲が「捨てたらどうですか」というようなものを、「間に合えばいい」と自分の手で修理しながら使いつづけたそうです。

質素節約を旨とし、海外の人が「東郷提督」はどんな大邸宅に住んでいるかと思っ訪ねてみたら、フランスの老農のような慎ましい生活だったと驚いたといえます。言葉は少ないものの、書き物は結構残っていて、いま私が勤務している海上自衛隊の幹部学校にも曾祖父の書が掛けられています。「智信仁勇嚴」

これは古来中国が将の心得としてきた五つの資質と聞きました。

おそらく曾祖父もこの五つを心に留めてきたからこそ、書にしたのだろうと思います。

将という「勇」や「嚴」が先に立つように思いますが、それよりも「智、信、仁」が前にきている。その順番が興味深いと思います。将とはいえ、戦場を離れたら一人の人間です。また、戦場でも一人で戦うわけではなく、海軍という組織で立ち向かっていきます。平素の生き方、平素の人間関係が、結果として有事に現れると思っ、「智信仁勇嚴」の五つのバランスを取りながら日々を過ごしてきたのでしょう。

東郷平八郎は日本海海戦でのバルチック艦隊迎撃というイメージがありますが、八十七年の生涯において、それはあまりにも短い一時期にしか過ぎません。そして「偉業」とされるその勝利も、曾祖父一人でなしたものではありません。しかし、その事例が後世の日本人に正しく評価されて、明治日本、その明治に至る長い日本の歴史に誇りと新しい歴史をつくっていく責任、さらにはこれからの国づくりに活かしていく力となれば曾祖父も喜んでくれると思います。